

《翻 訳》

WOLFGANG FIKENTSCHER 「法の方法」(七)

米 山 隆(訳)

本稿は WOLFGANG FIKENTSCHER, Methoden des Rechts in vergleichender Darstellung Band III. Mitteleuropäischer Rechtskreis 1976. J. C. B. MOHR (PAUL SIEBECK) TUBINGEN の著者と出版社の承諾により、翻訳である。

目 次

第二十八章 HEGEL と MARX 以後の法の方法——マルクスの法域——(第十巻一号・第十一巻一号・二号・三号・四号及び第十二巻一号)

S. 545 S. 544

(ff) 実証主義的な哲学と目的設定をする方法との間の障碍を克服することは MARX 自身にとってもまたすべての彼の後継者にとっても容易におちつかない。共産党宣言において市民層の歴史的に必然的な滅亡の予言に完全に媒介されることなく、「無産階級全部の利益を代表する」共産主義者への要請、「万国の労働者政党の決定的にして、ますます起動してゆく部分であること」の共産主義者への要請、また「無産階級の避けることのできない勝利」を実現することの共産主義への要請が⁽¹⁰⁾つづくのである。

STALIN、マルクス主義とレーニン主義の最も重要な思想家の一人もまた、大急ぎで障碍を乗り越えている。彼の基礎としている著作「弁証法的並びに歴史的な物質主義について」において次のように述べている。

「いかなる力強い意味を弁証法的方法の指導原則を社会的な生活の探求へ、社会の歴史の探求へ拡張することが持つか、いかなる力強い意味がこれらの指導原則を社会の歴史に、無産政党の実際の活動に適用することに帰属するかということを把握して理解することは困難ではない。」

『その上、世界が絶え間のない運動と発展にあるならば、古いものの滅亡と新しいものの生長が発展の法則であるとするならば、いかなる「動揺されない」社会的状態も存在することもなく、私的所有権と搾取のいかなる「永遠の原理」も存在することなく、農民の土地占有者への、労働者の資本家への服従のいかなる「永遠の理念」もはや存在することは無いということはいきらかである。』

したがって資本主義秩序は社会主義秩序によって代えられることができ、それは封建秩序が代えられたのと同じである。たとえ社会層が現時において優越している力をあらわすとしても、もはや発展しないその層に方向を与えられてはならないのであって、たとえその社会層が現時において優越している力をあらわさないとしても発展する社会層、未来を有する社会層に方向づけられなければならない。」

「それゆえ、社会の歴史に関する学問は社会生活の現象のすべての複雑性にもかかわらずきちんとした精確な学問になることができるのであり、生物学が社会の発展法則を実践において利用しつくすことができる学問になることができると我々が言うのと同様である。」

それゆえ、無産階級の政党はその実践的活動において何かある偶然的な動機から導かれてはならないのであって、社会の発展法則によって、この法則からの実践的な推論結果によって導かれなければならない。

「それゆえ社会主義は人類のよりよい未来に関する夢から学問に変遷する。」

「それゆえ、社会の実体的な生活の条件に作用する可能性、また、この条件の発展をはやめる可能性、この条件をよりよくすることをはやめる可能性を持つために、無産政党は社会学説、社会理念に支えられなければならないのであり、この理念は社会の実体的な生活の発展の必要を正しく表現しており、また、その結果、国民の幅広い量を動かすことができ、この量を動員化することができる、また、この量から無産階級の政党の大きい軍隊を組織化することができる、この政党は、反動的な力を打倒し、ま

た、社会の進歩的な力のために道を開く準備ができてい⁽⁸¹⁾る。」

何故しっかりと前もって決定された歴史的な経過が人間を行爲することに促すかという確信を与える理由づけを、認識されうるかぎり、いかなるマルクス主義者もまだ見つけたのではなく、その際 STALIN の仮借のな^い「それゆえ」「Also」の鎖は一般にそのつど先行している条文から理由づけられない^いことを注記する^いかなる明敏さも必要としない。純粹の運命的な決定論は純粹な自由選択的な決定論と並んで立っている。HEGEL と同様に MARX は「自由とは必然への洞察である」という人間をのみ承認する。それゆえ広汎に確定された、信用された定有哲学の枠内にある自由選択的な決定論が問題である。この自由選択的な決定論はマルクス主義者に、マルクス主義とレーニン主義が対処しているすべての問題のために、個々のものを目的としてその意見を述べ^ることを可能にするのであり、その際、目的は実証主義哲学からひきだされる。

(gg) 人間的な決定事象と決定委託としての弁証法の物質主義的な実証主義的哲学への影響とむすびつけられて弁証法的な思考のこの哲学への別箇の影響がある。歴史的に流れ去ることは、飛躍において、二律背反において、架橋されることができない対立において意味を与えられる。これは階級闘争に関する、すなわち、一つの階級の歴史的に流れ去ることに継起する階級を通しての^ある階級の絶えることのない克服に関する教説の基礎である。「^い真^い実^いの^い」生産力^いが^いますます^い変^い造^いさ^いれ^いて^い性質^いを^い変^いえ^いさ^いせ^いら^いれ^いる^い」生産関係から遠ざけられたならばいつでも、無理矢理の転覆に至るのである。この転覆を力によって促進することが共産主義者の課題である。それゆえ、法のなかに存在している一つの階級と違法のなかに存在している他の階級が、つねに、ある。世界は MARX によれば二つの架橋されることのできない階級に分けられ、将来を対目的に持つ階級と衰亡する（また衰亡にもたらされるにちがいない）階級に分けられる。この二階級学説は法に関するマルクス主義の理解にとって決定的な意味を持っている。

この代りに MARX は、何故、現代において一つの階級は将来の旗を対目的に、他の階級は歴史的に或種の滅亡を期待しなければならぬかを理由づけるにちがいない。階級矛盾のさしあたって普遍的に草案された像を具体的な状況へ適用することが問題である。

勝利している階級は無産階級であり、没落する階級は市民階級である。革命は経済的原因を持たなければならないので、いかな

S. 547

る範囲において今のところ生産力と生産関係が分れて口をあけているかを証明する必要がある。この証明を使用価値—交換価値—差額に関する教説が行っている。この教説によれば（市民の）搾取階級の歴史的な滅亡の原因は、この階級が商品の（労働という商品を含む）の使用価値と交換価値の差額利得の目的のために利用するということのなかに存立している。所謂理想的な使用価値は交換価値のために行われている経済を通して誤ってあらわされる。そのことを通して——さきに述べた仕方——搾取階級が吸いあげている剰余価値が発生する。使用価値のために行われるであろう経済において、剰余価値もまたそれを吸いあげることもしないであろう。したがって使用価値のための経済に将来が属している。この経済のなかにいかなる階級もはや存立しない。これは、簡単にいえば MARX のその教説の現代への適用である。

さて、使用価値—交換価値—差額は主張されることはもちろんであるが、証明されない。この点に、方法と哲学が一致しないこととならんで、マルクス主義のすべての変種のなかにあるこの主義に反対する第二の負担を重くしてゆく非難が存立する。使用価値と交換価値に従事している経済の代りに使用価値がわずかに存在する経済が登場する必然性が考えられることができる。ここにマルクス主義の宗教的な契機が存在するのであり、この契機は上述の第二章において強調された。

さて、この信仰内容は MARX のもとでは歴史の進行の実証主義的—物質主義的な被決定性から行為を委託することの、まさに詳述された任意の理由づけとむすびつけられる。否定されることを欲しない者は使用価値—交換価値—差額のことを信ずるにちがいない。信じない者は、社会主義的な社会においてこのことに関してその意識内容を存在せしめる権限を持たない。その意識は間違っている。訂正することが必要である。物差しは階級にふさわしい正しい意識であり、この意識は、結局、党派の首脳によって形成され、また、文言化される。マルクス主義的な共産主義の進歩のための党派性もまたこの一部である。誰の思想がここからあきらかにはずれているかということは、たとえこの共産主義が生長しているとしても、それが今なお若く、また、教育可能であるならば、精神病院における治療を通して意識の訂正が必要であり、強制養子の方途によるイデオロギーに忠実な養親への配分を通しての意識の手引が必要である。ここで脱線することが問題であるという広範にゆきわたった意見と区別して——離反者を薬剤をもつてする強制的取扱、また、子供を信頼できない両親の家から強制養子にすることはマルクス主義理論的に完全に秩序になつていないということを固守することが重要である。いやな思いをひき起すことは実践のなかにあるのではなくして、マルクス主義の理

論のなかにある。

S. 548

「官僚主義」はマルクス主義のよい端緒を窒息にもたらした、というようにしばしば提出された主張（マルクス主義者にとってこの主張は他人の債務を保証しようとする正鵠をえていない弁護のための主張）は危険なごまかしであるか、または、自己欺満である。マルクス主義は上述の方法によると異って「官僚的」であるということは全くありえないのであり、また、マルクス主義を人間の尊厳にふさわしいように形成する各々の試みは興ざめたことに至るであらう。そのために次の事例がある。一九七一年後の Jugoslawien における後退はその根拠をマルクスの理論——帰結から免れることのできないことのなかにもっぱら持っている。そして Dubček の運命は Prag の春以前理論的に、また、実践的に定まっていた。

それゆえ、マルクス主義の全体主義的な姿勢は結局その根拠を使用価値—交換価値—差額の前述の信仰のなかに持っているということが生じてくるのである。マルクス主義は独裁主義を含んでいる。その理由は、使用価値—交換価値—差額はただ信じられることができるにすぎないのであるが、しかし、証明されることも、また、どっちみち、操作されることもできないからであり、また、この差額にこそ剰余価値は依存しているのであり、また、それに、他方においてマルクス主義の政治的な要求が依存しているのであるからである。マルクス主義は、信仰はただ強制されることができないということを、政治的に通用させるべきである。

マルクスの独裁の根拠が示されてのち、今なおまさに提示された二つの階級理論から学問的であることの問いかけと真理の問いかけのためのマルクス主義的な立場が演繹されるべきであり、この立場をもつてマルクス主義的価値論の真理と物的正当づけが提示される。マルクス主義（あるいはそれ以外のなんらかの宗教）が所謂学問的であることは正当な意識の良心の強制と独裁のための別異の名称であるにすぎない。「嘘」はマルクス主義者に的中することができる非難ではない。ただし、マルクス主義者の宗教が学問的であることは矛盾であること、矛盾であることさえも現実のために調和するように現わすのである。もしマルクス主義者が、今日、このことを、また、立場を変えることなくして、明日、反対のことを言うならば、約束を守らないならば、信頼していることを真実でないと証明するならば、普遍的な理解にしたがって首尾一貫することなく行為するならば、これは信頼性のないこと、あるいは、虚偽であることの記号であるのではなくして、マルクス主義的な革命的な帰結の記号である。ただし、マ

ルクス主義者にとって市民的な視界における所謂嘘もまた革命の道具であるにすぎない。

(hh) それゆえ、マルクス主義の政治的な要求との結合において真理の問いかけのためのこのマルクス主義——特殊な態度からマルクス主義の各々の形態と変種は政治的に通用するものとして単に全体主義的な意識内容においてのみ規定された独裁においてのみ可能であるということが結論としてでてくる。官僚主義的な濫用はいかなるマルクス主義的な間違った方向の発展ではなくして、マルクス主義的な体系に内在している。

S. 549

(ii) ところで、重点が——信用されるべき、また、政治的に通用されなければならない——使用価値——交換価値——差額の上に置かれるのではなくして、それでもって要求された政治的——人爲的に操作されることができるときとして使用価値の客観化の上に置かれるならば、同じ成果に到達される。使用価値が ARISTOTELS の草履の事例において主観的な価値評価を表現しているのに、MARX のところでの使用価値は實際的——政治的な意味をもつ客観的に有効な操作者の性格を取得する。そのなかにもまたマルクス主義的独裁主義の本質が存立する。すなわち、何が汝にとって都合がよいことであらねばならないか、また、いかなる程度それが都合がよいことであらねばならないかは、汝にとって決定されている。それゆえ、「協議会」における「官僚主義的」であることが少ない使用価値——交換価値——差額の確定もまた何物を助けることはないであろう。ここにもまた民主主義的な手続としての協議会体制が機能しないことの原因の一つが横たわっている。

再び別異にいえば、マルクス主義が正義の値段をもつ——宗教として政治的に排他的な通用要求をもつて定義されるならば、独裁という結果におち入る。

(jj) これに反して——いかなる文言化においてもつねに——使用価値——交換価値——差額（使用価値の客観化、正義の——値段をもつ——通用）を多数決で決定することは恐らく民主主義的であるということとは非難されない。このことは行われることができることはもちろんであるが、これは全体主義的な思考内容のための多数決の決定を意味している。このように論理操作することは、HITLER を再び選ぶこと、「Weimar」の終焉をくりかえすことを意味するのであり、その理由は、背景をたずねることなく間違つて設定された経済概念とそれに支えられた階級のメルクマールが人間の精神を力でねじ曲げるのかどうか、あるいは、背景をたずねることなく間違つて設定された生物学概念とそれに支えられた種のメルクマールが人間の精神を力でねじ曲げるのかどうかは何らの

S. 550

区別もないからである。考え方は同じである。国家社会主義が市民的—資本主義的な「金権主義」に対する戦闘をマルクス主義から直接に受け取ったということ、また、マルクス主義がユダヤ教における相手を擬人化することを通して今なお追加的にこの戦闘を説得的たらしめようと試みたことが加わるのである。ファッシズムを市民的—資本主義的として分類化することはマルクス主義の重大な誤れる主張の一つであるが、この分類化は全体主義—非難に対する自己弁護の主張としてあきらかに思い浮かべられる。

別個の、しばしば聞いた、マルクス主義の必然的に全体主義的であるとする価値判断に対する異議は、政治的に意味を考えられ、たマルクス主義が思想的に必然的に全体主義的であるとしても、また、政治的に意味を考えられたマルクス主義が独裁を含むとしても、学問的方法的に、あるいは、専門的に使用される充分に受容しうるマルクス主義的な思考の所産が依然として残っているということの意味しているものであり、それは、歴史的な発展が経済的に条件づけられること、弁証法的な思考の実行と歴史の実行とこの実行が一つであることについての理論、生産手段の社会化の所有権分配の作用に関する経済論などに対する MARX の指摘が残っているのと同様である。この仕方では、あるいは類似の仕方では民主主義的な社会主義者の大部分は MARX を基本権民主主義のために救うことを試みる。とはいえ、このような試みの際使用価値倫理の政治的な要求及びマルクス主義的な構想が一つであることを見おとすであらう。

多くのうちの一つの事例として、マルクス主義的な労働価値説は、それは価格理論として、また、社会主義的な経済秩序のための計画基礎自体として役立つものではないという⁽¹⁸⁾ことを通じて反駁されえないという KARL GEORG ZINN の見解があげられる。しかし、労働価値説に関して、すべての価値は労働に還元されるべきであるということは、依然として正当であるので、資本は労働以前に正統化されなければならないのであり、また、労働は（労働争議において）資本以前に正統化されなければならないことはない。

この種の救済の試みは、MARX は社会的に考えたがゆえに、彼は正しいという意味表明に立ち至るのである。そのことにつき全く疑われるべきではない。問題はそうであるがしかし、人々は社会的に考え、また、行動しなければならないという証明ではないし、また、マルクス主義がこのように考え、行動することを要求するという証明でもなくして、いかにして社会主義はマルクス主義に条件づけられた独裁の無用の底荷なくして実現されることができるかということである。さらに、このようなマルクス論の一

面的部分観はマルクス主義の基礎理論の統一的性格を誤認する。⁽¹⁸²⁾

S. 551

(f) マルクス主義の個別的問題へのさらなる推論

(aa) 独裁のための思考の枠をマルクス主義において HEGEL の哲学が処理している。従つて歴史的な被決定性から個人的に行爲をゆだねることがでてくる。HEGEL はこの自由概念を必然的なことの洞察と名づける。この仕方では STALIN のもとでは「それゆえ—鎖」“Also-Kette”が、また BLOCH のもとでは「それゆえ」“Also”⁽¹⁸³⁾があきらかにされる。主意主義を歴史的に決定してゆくことへ何の媒介もなく導入してゆくことのための梃子は弁証法といわれる。誰が歴史的な流れを認識し、また、定義するか、また、政治的な行爲の方向を決定するかということは、政治的には HEGEL の自由概念からでてくる。ここから MARX は内容的な帰結をひきだしている。

MARX は、彼は HEGEL を（自身の言葉にしたがえば）「足で立たせた」、すなわち、ヘーゲルの観念論を唯物論に逆転したという⁽¹⁸⁴⁾ことを通して HEGEL を補充したということがしばしば意味を与えられた。それはたしかに正当であるかも知れないが、独裁の政治的な道具としてのマルクス主義の性質にとつて決定的でない。

MARX は、それゆえ、HEGEL によつてさしこまれた独裁主義の枠を（時代に拘束された）唯物論の表象をもつて著しく充足したのではなく、むしろ、使用価値—交換価値—差額に関する彼の経済論をもつて充足した。RICARDO に反対して向けられた使用価値の客観化は世俗的な正義の宗教の核であり、この宗教は、正しい価値は信ずるようになされ、また、この価値は政治的に行爲をゆだねることをもつて歴史的な世界の意味づけの基礎にされるということのなかに本質的に存立している。宗教的な、公理的な性格は使用価値のまさにこの客観化にこそ表現される。そのことを通して、マルクス説を宗教的なものの領域へ押しつけてゆく、というマルクスの基本綱領の主張性格と証明不可能性であることが発生する。⁽¹⁸⁵⁾

S. 552

さらに、MARX の著作では使用価値は経済的に必要な労働を通して定義されるということによつて、労働概念自体の使用もまた不確実性と証明不可能性を思考的な体系へ運び込むことに役立っているということは避けられないことである。労働は概念的に絶対的価値と等しいものであると比較され、この価値は、経験的な知と全く反対に、計測してゆく、また、秤量してゆく観察に手の届かないものである。労働の交換価値との方法的に許容されない比較を通して人為的に操作されない剰余価値概念が発生する。労働

S. 553

働は MARX の著作では使用価値領域の一部であり、商品価値は交換——また市場価値領域の一部である。このことを通して比較されることのできないものが比較される。それなら考えられることはもちろんであり、また、理想の世界をこの世の背後に建設すること、また、この世を改善するための普遍的な指針として、理想の世界のことを信ずることは自然法思考の発展において再三再四行われている。⁽¹⁸⁶⁾ その場合、しかし、MARX は労働概念を交換価値世界、すなわち、市場に付属させるにちがいないであろう。しかし、それとともに剰余価値、また、それとともにマルクス主義全部が手から抜け出てしまうのである。

使用価値—交換価値—差額の証明不可能性と無批判的な、見透しのない、また、それとともに同時に時間を越えた MARX の思考が関連する。上述の第二章においてマルクス主義は、時間を原則的に開かれた進行として把握することができないことを神秘的なグノーシス的にして、また、それ以外の断片化されて考えてゆく宗教、また、多かれ少なかれ自己の歴史と関係なく生きている文化とともに分ち合うということに関して問題にできなかった。もしも自由が必然的なものへの洞察であり、また、必然的なものが予見されることができるならば、「指導してゆく価値」(JASPER) は測定しうるものであり、また、評価することは、例えば、電子データ処理施設においてプログラムを立てられることができるであろう。

さて、しかし、じつにまた、自由、すなわち、歴史的発展の自由、成長の自由の派生語であるにすぎない経験が、評価はあきらかにコンピュータからとりだされることはできないということを示すならば、HEGEL は正しくない。WELZEL は、このことを「歴史を先験的な理念の自己実現の弁証法的な過程、経験が一致しなければならぬ過程として構成することができ、HEGEL の要求は——これは理性の最もむこうみずの冒険である——觀念論の力を誇張する(誇張した)」ということばをもって表現している。⁽¹⁸⁷⁾ それゆえ、自由は必然への洞察であるということが正しいとするならば、時間は存在しない。何が電子データ処理施設の投入をそのように限定的にしているかは、新しい事象であり、従来のことと等しい価値評価あるいは等しくない価値評価は不確定である。コンピュータは、今日、何人も知っているように、進歩に敵対的であり、進歩に不適当である。マルクス主義的に、進歩は歴史的な必然であり、そこからマルクス主義的な進歩概念は全く進歩と関係がないということがでてくると考えられた。

コンピュータは例としてのみ言及される。HEGEL の自己の歴史と関係のない歴史概念が重要であり、この概念は非批判的に非対話的に認識にアクセスすることを引受けるために MARX の歴史概念でもある。認識、学問、理論と実践が一つであることは、こ

ここで、思弁的な精神 (Hegel) と正しい意識 (Marx) に手が届くものである。歴史がころがってほめてゆくことは綱領化されており、その際、一つの役割を演じずる評価は核心において確定している。何が発展してゆくかは、必然的であり、自由でなく、内容的に確保されており、その可能性において傾向的に未決定であるのではない。同様にすべての種類のマルクス主義者の、しばしば驚きに値する程度 of 非歴史的な世界像が説明されており、この世界像は歪曲を補正された現代においてのみ存立しており、以前の価値の検討されるべき重要性、また、指導してゆく価値の検討されるべき重大性のもとにおける進歩してゆく発展のなかには存立していない。非批判的な歴史概念は、しかし、一般に歴史概念ではなく、また、マルクス主義者が問題を妨げられることなく自由に問ひかける際に、彼等はその信仰に信頼している。その場合、歴史的に見とり図を失うにつれて、別個のしばしば観察された現象、欠如している総合的な思考、個人化すること、及び、断片化のその他の形態が現われてくるのであり、その際、第一章及び第二章が全体的に指示されてよいであろう。

(bb) さらにマルクス主義的な問題完結性の原理から、すなわち、政治的な要求のために、精神的な独裁から次の成りゆきの束がみちびかれる。マルクス主義において、Hegel に則ると同様に、綱領化された成果が重要であるので、マルクス主義的な容態は必ず常に最も外部的な可能性に向けられる。マルクス的な政治、高い政治及び法政策は恒に最高の要求の実現をねらっている。それとの区別のなかに民主主義的政治、また、法政策の一般的な識別表示は、通常、最も可能な調整がある。この現象に東—西—衝突であるいは (JOHN F. KENNEDY 以来) 東—西—対話におけるすべての困難がもついている。この現象は、マルクス主義は世俗的な正義の宗教と歴史的に見られて一八世紀の終りの後に終末論が欠如していることに対する回答をあらわしているということからまたあきらかにされる。宗教、またそれこそマルクス主義は使用価値宗教とあらわされるべきであり、恒に、さらなる、また、最後の可能性の実現に向うべきである。それとの区別のなかに基本権民主主義は改革された俗人司祭の地位を政治へ移すこと以上のものではない。この点に、基本権民主主義の機能的な、形式的な性格がもついている。社会的なものの強調、社会的なパトスは、その際、マルクス主義において、また、現代の民主主義においておそらくひとしく強いものである。ヘーゲルの哲学をもって導入された「知性破壊」(SCHOPENHAUER) が強い社会的なパトスと結びつけられるならば、すなわち、例えば国家の代りに社会から出発するならば、また、この「認識関心」を労働価値理論が比較されることのできない労働価値と商品価値をもって当てる

ならば、成果は正確に MARX 論である。

マルクス主義の政治的構造において、またそれとともにその法的理解にとってこのことは、マルクス主義者は本質的に問いかけてられている対象に関して考えており、また、事物に関する判断をはじめて可能にする思考上の可能性を批判的に査定する状態にいないということの意味する。このことに、マルクス主義者が恒にみずからに攻撃してよいという権利を話しかけるが、しかし、攻撃されている者にとって同じく恒に平和的な解決を求めることを義務づけられていると考えるならば、それはマルクス主義の理論からの思考必然的な推論であるということが、なかんづく、基づいている。⁽¹⁸⁷⁾ この正直な暴力犯の地位へ即位させること、また、階級の敵をこの暴力の違法に存在する犠牲として断罪することはマルクス主義者にとっていかなる思考上の、あるいは、道徳上の障礙ではなくして、革命上の義務であり、⁽¹⁸⁸⁾ この犠牲を歴史的な役割を完成するためにのみ絶滅させることを通して矯正することができ、また、矯正すべきである。

(181) MARX-ENGELS, Manifest der Kommunistischen Partei, am Ende von Teil I und am Anfang von Teil II, hier zitiert nach der im Dietz-Verlag, Berlin, erschienenen Ausgabe, 9. Aufl. 1953, S. 22ff.

(182) STALIN, Über dialektischen und historischen Materialismus, 8. Aufl., Berlin 1951, S. 9, 10/11, 17, 21/22. すべて含まれた決定論と行為の委託の自己矛盾のため、auch G. H. SABINE, Marxism, Ithaca, New York 1958.

(183) KARL GEORG ZINN, Volkswirtschaftliche Aspekte von Arbeitskämpfen, in: MICHAEL KITTNER, Hrg., Streik und Aussperrung, Frankfurt/M. 1973, 177ff., 180ff., ZINN は、すべてが、全体主義題目に触れていない。他の領域からのあらゆる事例、HANS-ULRICH WEHLER, Modernisierungstheorie und Geschichte, Göttingen 1975, 55-57 は、マルクスの歴史哲学に対するすべての非難にかかわらず、「それでもやはり、経済的発展の、社会の変遷の、政治的支配の、理念の及び観念論の作用関連を把握すべき普遍的なマルクスの意図が固守されることができ、また、これらの交互作用から発展過程の力学が演繹されることができ、という意味を与えている。WEHLER は、MARX はいかなる交互作用も主張したのではなくして、経済的要因の単一原因関係を主張したのであったし、この単一原因関係は彼の階級構想からのみ理解されるべきという点を誤認している。全体主義を骨抜きにされた MARX は決して MARX ではない。FRITZ SACK, Definition von Kriminalität als politisches Handeln, der labeling approach, KrimJ 4, 1972, 3ff. の著作で、MARX を召喚するとは個人的な信仰に収縮するものであり、この信仰はそれ以外に確信してひびくゆく論証のためにいかなる理

- 由つけの価値も与えるものではない。LOTHAR PHILIPPS, Aufgaben und Wertungen als Gegenstände der Logik, ARSP Beiheft NF6 (法の経験領域における存在の証明) Wiesbaden 1970, 59 ff. は MARX を直覺説的な法論理の問題を解くために利用する。ZINN は MARX を言う。また、社会的な感覚の意味を与えている。WEHLER は MARX を言う。また、歴史的な影響の相互依存性の意味を与えている。SACK は MARX を言う。また、経験と言語理論の対話の意味を与えている。PHILIPPS は MARX を言う。また、歴史化してゆく観点のもとにおける集団倫理——すなわちこのための流行にちかわない理由づけ——の MARX の意味を与えている。マルクス主義的な思想の全体を過度に要求するものに反対しているのはまた ZIPPELUS, Allgemeine Staatslehre, 5. Aufl. 1975, 121. 更に見え、CHRISTOF HELBERGER, Marxismus als Methode, Wirtschaftstheoretische Untersuchungen zur Methode der marxistischen politischen Ökonomie, Frankfurt/M. 1975; K. G. ZINN, Arbeitswerttheorie, 1972.
- (82) ERNST THEODOR MOHL, aao (oben bei Anm. 172), 17 ff., 23.
- (83) STALIN のなご上述の注(四)。BLOCH のために後述の注(95)。
- (83a) MARX の著作で、HEGEL の著作でなく、歴史を決定するものを「主意化してゆへん」のために HEGEL の弁証法概念の使用可能性は、HEGEL のすべての精神性からマルクスのな上部構造論への歩みが実行されるならば、生ずる。そのために上述の(a)。
- (84) 例えは、LUKÄS を通じて、上部構造—下部構造—関係のその他の意味づけは、少からず全体主義的情操から自由であり、政治的にはむしろはるかに都合悪い結果になつてゐるのであり、その理由は、つねに考えうる管理は観察されうる資料を通してぬけ落ちてゐるからである。FIKENTSCHEER, Zur politischen Kritik, 37, Anm. 40, auch 53, Anm. 72.
- (85) そのため個々の点にこつこつは上列の第二章V。
- (86) HANS WEIZEL, Naturrecht und materiale Gerechtigkeit, zusammenfassend, 243.
- (87) HANS WEIZEL, Naturrecht und materiale Gerechtigkeit, 183, unter Bezugnahme auf Hegel, Philosophie der Weltgeschichte I, 137.
- (88) 近代からのただ一つの事例、ロシア人は北ベトナムのために南に向つて非軍事的地帯を越えて四月——一九七二——攻撃のための審議と物資をよなへつけた。NIXON はそれにながして爆弾戦争を Hanoi と Haiphong を含む全北ベトナムにひろげたとき(このことは人間的に、また軍事的にきわめて攻撃されるのであつてであつたかも知れない)。Prawda は、一九七二年四月一六日、権限を与えられた説明において「このことは、NIXON はベトナム紛争の平和的収拾に関心を持つてゐるという彼の発言と極端に対立するであらう」と述べた。この——民主主義者になつて——Prawda のマルクス主義的な著作家になつて矛盾のある容態は決して認識されなかつたといふことは、確信をもつて承認されることのできる。自己の容態、また他人の容態に適用された尺度の間の矛盾、ここでは侵略の暴力、あ

ちらでは、平和的に振舞う義務は、マルクス主義的な視界では全く存在しない。マルクス主義は、ヘーゲルの「知性破壊」についての SCHOPENHAUER の言説を変化させて異なったものとするために、考えることから疎外することである。

(189) この点に世界改革の手段としてのマルクス主義的な緊張緩和概念の機能性がまたもついている。その背後に決して正しくないこと、まして偽りがかくれているのではなくして、かつて選ばれた「歴史的な」立場からの思考必然的な帰結がかくれているのである。この注記を反マルクス主義的として、あるいは、反共產主義的として理解することはできないであろう。LENN は、マルクス主義における真理と虚偽、情報と契約のような範疇は決して「市民的な」意味を持たないということに関する疑問を残さなかった。„Prawda”とはあまりにドイツ的に單純に真理を意味している。